



特集

対話しながら 論説を読む

筆者のものの見方・考え方を捉え、自分の生き方と結び付けて考えさせる。そのためにはどんな授業が効果的なのでしょうか。
中学校最後の説明文「誰かの代わりに」の授業を取り上げながら、具体的な手立てや指導のポイントを探ります。

授業リポート

単元名 **未来に向かって**

使用教材：「誰かの代わりに」（三年）
「わたしを束ねないで」（三年）

お茶の水女子大学附属中学校教諭

宗我部義則

三年生（三十名）

新教材の説明文「誰かの代わりに」について、本誌80号（P14・15）で魅力的な授業のアイデアを提案された宗我部義則先生。

「筆者と対話するように、クラスで考えを述べ合う授業がしてみたい」と語る宗我部先生は、実際の授業をどのように展開なさったのでしょうか。全五時間で計画されたその授業の全体を、詳しくご紹介します。

指導計画 （全5時間）

第一時

表現を工夫して、詩を朗読する
・詩「わたしを束ねないで」のリレー朗読・群読をする。

第二時

自分の考えをもつ
・学習課題を確認する。
・説明文「誰かの代わりに」に関連する三つのキーワードについて学習班で話し合い、自分の考えをもつ。
・次時までの課題として、教材文を読み、感想を書く。

第三・四時

感想を交流する
・キーワードについての各班の考えを全体で交流する。
・本文中の共感・納得・疑問に思った部分について班内で共有する。

第五時

全体で話し合い、筆者の考えを理解する
・各班の共感・納得・疑問を全体で共有する。
・疑問を整理し、それに答える班を決める。
・担当した疑問について、班で話し合う。
・全体で話し合い、筆者の考えを理解する。
・班ごとに考えを発表し、全体で話し合うことで、筆者の考えを理解する。
・学習の振り返りを書く。



撮影：長岡博史（P6・7下・8・13）／
寺井忠之（P4・5・9～11）／鈴木俊介（P14）



▲各班を回って話し合いを聞きながら、生徒たちの共感・納得・疑問について見取っていく宗我部先生。

第一時 「自分」に向かう目を

↓表現を工夫して、詩を朗読する

生徒たちが進路について考え、悩み始める十一月。今の「私」を見つめ、そのうえで、クラスで対話しながら考えを深める単元「未来に向かつて」の授業が始まった。

本単元では、説明文「誰かの代わりに」を単独で読むのではなく、教材配列としては後ろの詩「わたしを束ねないで」を、あえて先に読む。「誰かの代わりに」を主体的に捉えるには、まず「私」という意識を喚起し、「自分」に向かう目をもつことが必要である。宗我部先生はそう考えたのだ。第一時は、グループごとに一連ずつを担当し、リレー朗読を行う。生徒たちは、国語便覧で作者の生きた時代を調べ、言葉に込められた思いを想像していく。そして、「社会の目や、拘束されている何かから解放されたいという叫び」など、それぞれに感じ取ったことを朗読に生かしながら、「私」「自分」へと深く思いを巡らせていた。

第二時 文章を読む前に話し合おう

↓自分の考えをもつ

ここから、いよいよ「誰かの代わりに」に取り組む。「論説」の文章です。宗我部先生の声が教室に響く。黒板には、目標と学習課題。先生は、「ダイコンは大きな根?」「二年や「君は『最後の晩餐』を知っているか」「二年など、既習の説明文を想起させながら、論説という文章形態へと、生徒の意識を向けていく。「筆者のものの見方や考え方を捉えて、自分の生き方を考える。それが今回の目標。まず、論説の三つの読み方について、自分なりにこつをつかんでいきましょう」と言って、先生は読むときの観点を三つ示した(下写真)。

そして、こう続ける。「鷲田さんの文章を読んで、新しいことに気づいたり、考えが広がったり。そんな変化が少しでもあるといいですね」。そのために、文章を読む前に、下の三つのキーワードについて学習班で話し合うよう、生徒に指示した。

第三・四時

班で考えた疑問への答え

↓感想を交流する
↓疑問を出し合い、班で話し合う

↓感想を交流する

三つのキーワードの②・③について、班で話し合ったことを発表する。そこから授業は始まった。「自分」とは『自分の演出家』『自立』とは、親からの援助の断ち切り」など、さまざまな考えが出される。

宗我部先生は、一つ一つを受け止めた後、生徒たちに指示をした。「班ごとに、共感・納得・疑問に思った部分とその段落番号について、文章に引いた線と同じ色の紙にまとめてください。共感・納得は一枚の紙に全て収め、疑問は一枚のカードに一つずつ書いてください」。生徒たちは、早速、教材を読んだ感想を班内で共有しながら、書き込みにとりかかっていった。



▲黒板に貼り出された共感・納得・疑問点を興味深く見つめる生徒たち。

↓疑問を出し合い、班で話し合う

各班の紙を、先生が黒板に貼り出していく。全ての班の共感・納得・疑問点が見渡せるようになった。似た内容を書いた班もいくつかある。各班の共感・納得点についてクラス全体で共有した後、先生はこう切りだした。「今度は疑問の水色のカードを、似たものでまとめて整理してみよう」。

生徒たちは「自立」「弱さ」「苦勞」などの共通点を見つけ、自由に発言していく。先生はそれを受けてカードを並べ替える。十六枚あった疑問のカードは、最終的に次ページの八つのまとまりに整理された。

- 〈三つのキーワード〉
- ①「誰かの代わりに」に続く言葉とは。
 - ②「自分」とは。
 - ③「自立」とは。



疑問 (四角囲み数字は段落番号を示す)

- ▼なぜ、「何にでもなれる社会」では、人生において何を成し遂げたかで存在価値が測られるのか。(5)
- ▼「自立」は「独立」のことではないとは。「強さ」「困難を一人で抱え込まないこと」が、なぜ「自立」なのか。(9) (11)
- ▼日本語の意味を説明するために、英語を使ってもいいのか。(9)
- ▼「誰かの代わりに」という意識とは。(11)
- ▼責任が「最後まで独りで負わねばならないものではありません」とは、どういうことか。(12)
- ▼「超えてはならない、克服してはならない苦労」とは。(14)
- ▼自分の中ばかりを見ていても、自分が存在することの意味を探し出すことができるのでは。(14)
- ▼「人間の弱さは、それを知っている人たちよりは、それを知らない人たちにおいて、ずっとよく現れている」とは。(17)

「八つの班がそれぞれ一つずつ疑問を担当し、話し合って自分たちなりの答えを考えてもらいます」と、先生。担当する疑問が決まると、班での話し合いが始まった。生徒たちは、班で考えたことの説明を一枚の画用紙にまとめていく。これを使って、次時、各班の発表が行われる。

第五時

筆者が言いたいことは……

全体で話し合い、
筆者の考えを理解する

黒板には、各班の緑・ピンク・水色の紙が並ぶ。その中で、水色のカードに書かれた「疑問」について、みんなで考える学習が始まる。班ごとの考えを、文章に書かれている順に発表し、全体で話し合っていく。「文章の後半に疑問が集中しているね。特に、[11]『誰かの代わりに』、[14]『克服してはならない苦労』を捉えることが、鷺田さんの考えを理解する手がかりになりそうです。自分の考えをもつ前段として、まずは鷺田さんの考えを理解する。そのために、今日は疑問を放り出さずに積極的に発言し、考え、深め合っていきましょう。」そう宗我部先生が語り、各班の発表が始まった。

各班の話し合いの一場面

■C班の場合

——「超えてはならない……苦労」とは。
生徒1 ……この「人として生きることの意味」っていうのが大事なんだよね。
生徒2 そうそう。……で、苦労が他の人たちとの関わり合いとかをもたらしにくれるから、そこに自分が存在する場がある。それが、人として生きることの意味につながるんじゃないかな……。
生徒1 この「人生」って、「一人の人間としての」ってことでしょ？ だから、一人で超えるんじゃないくて、みんなで苦労を超えるってこと？

■D班の場合

——『誰かの代わりに』という意識とは。
生徒1 「他人との支え合い」だから……。
ん？ 誰かの「代わりに」？ 誰かを「支える」んじゃないくて？
生徒2 そう。「代わりに」なんだよ。
生徒3 鷺田さん、ちょっと大げさに言ってるだけなんじゃないかな。
生徒1 でも、ここ、重要そうだよ。わざわざ「誰かの代わりに」って言った理由。……なんでなんだろう？

「自立」とは？

「『自立』は『独立』のことではない」とは。

E班 辞書での「独立」の定義は、「他の助けを借りず、孤立して一人で生きること」。「自立」については、[11]に「他人との支え合いのネットワークをいつでも使える用意ができているということ」と書かれています。つまり、「人とのつながり」がないと、「自立」とはいえない。そこが「独立」と「自立」の違いだと考えました。

「強さ」「困難を一人で抱え込まないこと」が、なぜ「自立」なのか。

E班 [9]の「こころいう強さ」は、「引き受ける強さ」を指します。「引き受ける」とは、人とのつながりによって発生すること。そこから、「引き受ける強さ」を「自立」とよんでいるのだと思います。そして、「一人で抱え込まない」ことは、人とのつながることなので、「自立」といえます。



▲班の発表を聞きながら、適宜、説明を書き足していく先生。

生徒たちは、ノートにメモを取りながら、発表に真剣に耳を傾ける。先生は、適宜、画用紙に説明を書き足していく。そして発表後、「今の説明で、よくわからなかったことはありますか」と全体に投げかけた。すると、一人の生徒が疑問を口にした。

生徒 「引き受ける」ことが「自立」なのはわかったんだけど、どうして「引き受ける」ことが「強さ」なのかが知りたいんです。
先生 今の問いの意味、わかったかな？ 困難を引き受けるのが、なぜ「強さ」なのか。これは[14]の「苦労」の話とつながりそうなので、C班の発表を先に聞いてみましょうか。



生徒4 うん。
生徒2 あ、責任！「支える」だけじゃなくて、「代わりに」っていう責任。意識的な問題じゃない？ ……よくわかんなくなってきた。
生徒1 「支える」だと、サポートって感じ。
生徒2・4 うん。
生徒1 で、「代わりに」だと、それに責任を伴う……？



▲食い入るように黒板を見つめて考える生徒たち。

「引き受ける強さ」とは？

「超えてはならない、克服してはならない苦勞」とは。

C班 「苦勞」がもたらすものに着目して私たちに考え、「超えては」と「克服しては」の前に「一人で」という言葉を入れてみました。「人生には（一人で）超えてはならない、（一人で）克服してはならない苦勞がある」。^[14]の最後の一文は、「自分の意味や役割は、他人との関わり合いの中で自覚していける」ということだと思えます。苦勞を一人で乗り越えようとすると、他との関わり合いは生まれにくいけど、苦勞を他と共有して関わり合うことで、自分の生きる意味を見いだせる。鷺田さんは、そう言いたいんじゃないかと思えます。

先生 苦勞を引き受ける。それが、生きる意味を知ることにつながる、と。さあ、意見のある人はいますか。

その後、生徒からの疑問や隣の席どうしでの話し合いを挟みながら、各班の発表は続いていく。と、ここで一人の生徒がつぶやいた。

「『誰かの代わりに』という意識」とは。

D班 私たちは、「支える」ではなく「代わりに」と表現している点に注目しました。

「支える」とは、他人を助けるただの「サポート」。「代わりに」と表現することで、そこに「責任」が加わると考えました。^[12]によると、「誰かの代わりに」という意識は「責任を負う」ことの本来の意味。そしてそれは、^[11]にあるように、他人との支え合いのネットワークや、自分が支える側に回る用意があること。そこから、「誰かの代わりに」は「自立」につながると考えました。**先生** だんだん重なってきたね。では、「強さ」の方向からも考えていこう。G班、お願いします。



▲各班、代表者が前に出て発表していく（写真はC班）。

生徒 ^[9]の一行目の「自立」は、筆者の言う「自立」ではなく、一般的な意味での「自立」なんじゃないかな……。

先生 そうなんだろう。ちよつとみんなで検討してみましょうか。

生徒たちは、それぞれに隣との話し合いを始める。そんななか、「ああ、そういうことか！」という声上がる。

先生 なになに、みんなに教えて！

生徒1 ここは、今の社会には「自立」を「独り立ちして誰にも頼らない」という「自立」の意味とはき違えている人がいるけど、

「人間の弱さは、それを知っている人たちがより、それを知らない人たちにおいて、ずっとよく現れている。」とは。

G班 人間の弱さを知っている人は、それに屈しないように事前に対策ができるし、屈したとしてもすぐに対処することができ。でも、弱さを知らない人は対処ができないため、「弱さがずっとよく現れている」といえるんじゃないかと考えました。**先生** C班の発表の後に出了た「弱く思えるけど、実は強い」という話につながるね。

先ほどの「支え合うことこそ強さ」という話に結び付けるように、先生は投げかけた。このとき、一人の生徒が手を挙げた。

生徒 これも、C班のときの話とつながると思うんです。^[17]だけでなく、他と合せて考えると、弱さを見せ合うことで支え合えるから、弱さに対処できる。弱さを知っている人は、支え合って弱さを強さに変えていける。だから、鷺田さんは、「人間の弱さを知っている人は、強くなれるんだよ」って言いたいんじゃないかと思えます。

それは誤解なんだよっていう意味だと思っんです。

先生 つまり、これは筆者の言う「自立」だということだね。みんな、見えてきたかな？

生徒2 ……E班への質問で出了た「引き受ける強さ」のことも説明できる気がします。

先生 じゃあ、みんなに説明してみて！

生徒2 この後の^[10]・^[11]では、「独立」ではなく、支え合う「自立」が強いんだと言っています。自分だけでなんとかするのではなく、他に引き受けて助けてもらい、自分もまた引き受ける。それは一見、自分の弱さを見せるようにも思える。でもそうじゃない。そうしてお互いに支え合うことこそが、最終的にお互いの「強さ」につながるんだっていう話なんだと思うんです。お互いがお互いを強くしていくというか……。

先生 ちよつと見えてきた気がしますね。

「自立」と「強さ」の関係

話し合いは、少しずつ、「自立」と「引き受けること」「強さ」の関係に迫っていく。依然として、「引き受ける強さが『自立』とどう関係しているのか」という疑問がもやもやと残るなか、残りの班の発表は続く。

先生 おおつ、解決してきたかな？

その後、最後の班の発表が終わり、先生は、生徒に向けてこう語りかけた。「鷺田さんが提案する『自立』の意味を、今日はさまざまな角度から考えることができましたね。『自立』『独立』『責任』今の時点ですつきりと納得できない部分もあるかもしれない。だから、今回を考えるスタートとして、これから生きながら、皆さんが考えていく。これからのいいなと思います。生徒に満足げな笑顔が広がっていく。最後に先生から、振り返りを書く指示が出され、授業は終わりを迎えた。



▲黒板をうまく使いながら、各班の発表を関連づけて筆者の考えに迫っていった。



学びの深まり——生徒の言葉から

授業を振り返って、生徒が書いた文章の一部をご紹介します。

丁さんの疑問のおかげ

もっとも楽しく、考えが深まったのは、最後の授業で行ったクラスでの討論です。「わからない」をどこん突き詰め、納得できるまで話し合うことで、文章の陰に隠れた鷺田さんの言いたいことに気がつくことができたような気がします。特に、丁さんの『強さ』と『自立』の違いがわからない」という疑問は、討論の内容を奥深いものにしたと思いました。

人と関わり、自分が創られる

文章を読む前と読んだ後で、自分についての考えも変化しました。初めは、「一人一人の心に存在するもの」という、本当の自分は内に秘められているという考えでした。しかし、読んだ後では、「同じ人は自分しかおらず、多くの人と関わったことで、自分が創られる」という考えに変わり、人との関わりを大切にしようと思えました。

鷺田さんと対話する感覚

この文章を読みながら、共感したり納得したり、疑問に感じたりすることで、鷺田さんに対して感じるような感覚を体験しました。(略)特に、自分の中にあつた「自立」の定義が変化することが大きな発見です。私は「自立」とは「自分で生きられること」というイメージをもっていたのですが、この文章を読むと、そうではなく「他人とつながり、助け合う力」のことを指しているのではないかと考えるようになりました。

将来への不安を抱える私にとって

「自分とは何か」という問いは、中学生になってから自問することが多くなりました。進路を深く考えるようになったからでしょうか。これから自分は何をするのかという将来に向けての漠然とした不安を抱えている私にとつて、この文章は共感・納得の嵐でした。「自分は本当に必要な存在なのだろうか」という言葉に対してドキッとなったのも事実です。

「支え合い」と「最大限の努力」

自分の存在と他人や社会との関係について、共感する部分がとても多かったです。(略)ただ、「誰かが自分の代わりにやってくれる」という社会だと「責任」を個人で背負わなくてもいいという安心感とともに「無責任」で「人任せ」となってしまう、「自立」でなくなる人も必ず出てくると思うので、私は「支え合い」といっしょに「最大限の努力も必要だ」と感じました。

行動に移すのは難しい……

たしかに、社会生活では他人と助け合うことが大切だと思いました。しかし、自分が行動に移せるかというところがあるなと思いました。(略)実際、私は「弱さ」を他人どころか家族にも見せられていません。自分の「弱さ」を他人に見せることは怖いです。でも、それができようになれば、苦労や困難に対する負担は減り、楽になると思います。いつか、他人に「弱さ」を見せ、人の困難や苦労も受け止めることができるような人になりたいです。

授業を終えて

宗我部義則

三年間の締めくくりについて

私は、中学校の三年間は「自立と自治」を育てるためにある、と考えています。「誰かの代わりに」はまさに、三年間の締めくくりとして、それを改めて生徒たちに考えさせるにふさわしい教材だと感じました。ですから、生徒自身に考えさせ、話し合わせながら、この教材に書かれていることを自分の問題として引き付けながら読んでいく授業を組み立てました。

筆者と向き合わせるために

まず「耕し」として、第一時で「自分」とは何かを考えさせたいので、三つのキーワード(P6)を提示しました。辞書的な意味ではなく、「自分はこう考える」と、自分のこととして少し哲学的に考えさせた結果、教材に出会ったときの衝撃は大きなものになりました。いきなり教材と向き合わせることもありますが、今回こうした仕

掛けをすることで、筆者との対話がより深いものになったと思っています。

カードで見取る

話し合い活動では、全ての班の内容を私が見取るのは不可能なので、カードを利用しました。例えば「疑問」のカードを見ながら、この班には「こういう問いを重ねてみよう」とか「こういう分岐点を示してみよう」などシミュレーションしておき、話し合いが行き詰まったときに声かけをする。これが、結果的に生徒の話し合いを活性化させ、深化させていったのでしよう。

生徒自身に考えさせたい教材

ある生徒は、教材に対して初めから違和感があったそうです。「私は、他人に自分のことを評価してもらおうと思ったことがない」と言うのです。すると周りの生徒が、「理想はそうだけど、どこかそう思えない

自分もいる」などと応じ、授業後、お互いに本音での話し合いが始まりました。そこで私が、教材の元となった『特別授業3・11 君たちはどう生きるか』(P15)を紹介したところ、すぐに学校図書館に行つて読み始めました。きつと、鷺田さんの文章に揺さぶられ、自分自身のさまざまな問いに立ち向かおうと思ったのですね。

「誰かの代わりに」は、鷺田さんの言うことを完全に理解させようとするより、自然に生まれてくる問いについて生徒自身に考えさせたい教材です。指導の際には、そうしたことを意識されるとよいかもしれません。

(談)



1962年、埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題(中学校国語)」作成および分析委員。平成20年告示「中学校学習指導要領解説国語編」作成協力者。光村図書 中学校「国語」教科書編集委員。